



ともに歩む

2025年8月1日 2号
カトリック土崎教会

発行者：エジルソン神父 c.tsuchizaki@gmail.com

～神様と、共同体と、日々の暮らしの中で～

【聖母の被昇天】

希望のしるしとしての教義

カトリック教会は、1950年、教皇ピオ12世によって「聖母マリアの被昇天」をドグマ（信仰上の教義）として定義した。これは、マリアが地上の生涯を終えた後、体と魂をともに天の栄光に上げられたという信仰であり、イエス・キリストの復活と救いの業に最も深く参与した存在として、マリアがその完成に先立ってあずかったことを意味する。

この教義は、聖書に明確な記述があるわけではないが、マリアの特別な神との一致（ルカ1:28）や、原罪の影響を免れた存在であるという「無原罪の御宿り」の教義と深く関係している。

また、**初代教会から続く伝承**の中で、マリアの遺体が残されていなかったという言い伝えがあり、6世紀にはマリアの被昇天を祝う典礼が東西教会に定着していた。

このドグマが示すものは、単なるマリアに与えられた光栄ではなく、私たちすべての信徒に対する神の約束のしるしである。つまり、神に従い、恵みに生きた者は、やがて体も魂も共に救われ、永遠のいのちにあずかるという希望である。

マリアは教会の母、信仰の模範として、地上の旅路を歩む私たちに寄り添い、その取り次ぎによって私たちもまた「神の栄光にあずかる者」となるよう導いてくれる。彼女の被昇天は、すべての人間の尊厳、体の救い、永遠の命への道を照らす光である。

なお、**聖母の被昇天のミサに参加できない方は、土崎教会でのミサが行われる8月15日午前10時に合わせて、「お告げの祈り」を唱えて、この大きな祝日に心を合わせてくだされば幸いです。**

【聖伝について一生きた信仰の流れ】

カトリック教会において「聖伝（せいでん）」というとき、単に長年続いている習慣や文化的な伝統のことを指しているのではない。ここで言う「聖伝」とは、「使徒的聖伝」とも呼ばれ、イエス・キリストが教え、行い、そしてご自身のうちに示された神の真理を、使徒たちが受け取り、それを最初の教会共同体の中で生き、守り、伝えてきた信仰の遺産のことである。

この聖伝は、神がご自身を人類に示し、その救いの計画を明かされた啓示、すなわち「信仰の遺産」を内包している。

この啓示は旧約においては預言者や聖書の著者たちを通じて、そして何よりも新約においては、神の子キリストご自身によって与えられた。そして使徒たちは、そのキリストの言葉と業、教えと命を受け取り、教会の中で忠実に保ち、後の世代へと生きたかたちで伝えてきた。

このように、聖伝と聖書はともに神の啓示を含んでいる。聖伝は、信仰宣言（使徒信条やニケーア・コンスタンチノーブル信条）、典礼と祈りの実践、聖人たちの生き方、教父や教会博士の著作などを通して、私たちに届いている。そして教会の「教導権（マギステリウム）」は、聖霊の助けのもと、この啓示を忠実に保存し、正しく解釈し、すべての世代に伝えていく務めを果たしている（参照：ヨハネ16・12-13、ルカ22・32、ヨハネ21・15）。

つまり、聖書も聖伝もともに「神のことば」であり、奇跡と預言によって確証された神の教えである。ただし違いがあるのは、聖伝は最初から書き残されたものではなく、使徒たちの生きた宣教と共同体の実践を通して伝えられてきたという点である。のちにその内容が文章として記録されたこともあるが、本質的には口伝と実践の中で伝えられたものであった。

カテキズム第82項には次のようにある。「教会は、啓示されたすべてのことがらに関しての確信を、ただ聖書から得るのではない。したがって、聖書と聖伝の両方は、同等の敬虔と尊敬の心をもって受け入れ、尊ばなければならない」。

聖書だけが神のことばではない

ここで大切なのは、神のことばとは

聖書そのものを指すのではなく、**聖書は神のことばを記したものであるということである**。言い換えれば、神のことばとは、「聖なる書物」以上のものであり、それは何よりも「受肉し、生きておられるみことば」、すなわち御子イエス・キリストのことである。

そのことを理解する助けとして、ヨハネ福音書21章25節を見てみよう。「イエスが行われたことは他にも多くあるが、それらを一つひとつ書き記すなら、世界中をもっとしても書かれた書物を収めきれないだろう」。つまり、キリストが教えられたすべてのことは書ききれるものではなく、書かれなかった教えも確かに存在し、それらが教会のうちに伝えられてきた。それが聖伝である。

カテキズム第108項もこの点を強調している。「キリスト教信仰は『書物の宗教』ではない。キリスト教は神のことばの宗教であり、それは『文字にされ沈黙する言葉』ではなく、『受肉し、生きておられるみことば』である」。ゆえに、聖書を「文字として」だけ理解するのではなく、生けるキリストの導きのもと、聖霊の助けによって「開かれた心」で読み取らねばならないのである（ルカ24・45参照）。

聖書は教会から生まれた

そもそも新約聖書そのものも、最初から存在したわけではない。イエスが弟子たちに命じたのは、「行って、すべての民に福音を宣べ伝えよ」（マルコ16・15）であって、「書き記せ」ではなかった。実際、新約の文書群が書かれ始めたのはキリストの死後20年ほど経ってからであり、紀元100年頃までにまとめられた。また、それらが教会全体に広まり、正典として確定す

るまでには、さらに長い時間を要した。

その間、使徒たちとその弟子たちによる宣教と教会生活は、まさに聖伝そのものであった。彼らは生きた声で福音を伝え、洗礼を授け、ミサを捧げ、信仰を教えた。パウロはこう記す。

「私たちの言葉によって、また手紙によって伝えた伝承をしっかりと守りなさい」（テサロニケ二2・15）。また「あなたが私から多くの証人の前で聞いたことを、他の人にも教えられる信頼できる人々に委ねなさい」（二テモテ2・2）。これらは、文字だけでなく、口伝と生活の中で信仰が伝えられていたことを示している。

したがって、もし聖書だけが信仰の唯一の源であると考えるならば、聖書がまだ存在していなかった初代教会には信仰のよりどころがなかったことになってしまう。しかし、教会はキリストの死と復活の直後から、聖霊の導きのもとに生きた信仰を保ち続けていた。人々は使徒たちの教え、共同体の祈り、聖体の交わりの中で信仰を受け取り、育んできたのである。

このことから、信仰は聖書だけによるのではなく、それ以前から続く生きた伝達—すなわち聖伝—によっても支えられてきたことがわかる。聖伝と聖書は切り離すことのできない、神の啓示の二つの流れであり、共に尊ばれるべきものである。

教会があつてこそ、聖書もある

最後に強調すべきことは、聖書が教会から生まれたのであって、教会が聖書から生まれたのではないという点である。どの文書が正典であり、どの解釈が正しいのかを判断したのは、聖霊に導かれた教会であった。ゆえに、教

会の権威と導きがなければ、聖書の正しい意味も確かにすることはできない。

聖アウグスティヌスはこう言っている。「私が福音を信じるのは、カトリック教会の権威が私にそうするよう教えるからである」。また、3世紀の教父、聖チプリアヌスはこう語った。「私たちは皆、教会の胎から生まれ、その乳によって養われ、その霊によって生かされている」。

教会は母である。信仰を教え、キリストと結ばれた命に導き、わたしたちを守り育ててくれる母である。聖伝はその母の記憶であり、神のことばの生きた声なのである。

このように、カトリック教会の教義、特にドグマと呼ばれる信仰の核心部分は、必ずしも聖書の文字の中に明確に記されているとは限らない。しかし、それらは決して聖書と無関係なものではなく、むしろ聖霊の導きのもと、教会が使徒たちから受け継いできた生きた信仰、すなわち「生きている神のことば」である聖伝に深く根ざしている。教義は、書かれた言葉だけでなく、教会の祈り、生活、そして証しを通して保たれてきた信仰の真理を明確に言い表すものであり、それゆえ、今を生きる私たちにとっても変わることはない道しるべとなるのである。



神の母、聖マリア、
私たちのためにお祈りください！

【高校で宗教を教えるということ】

4月から土崎教会に赴任して以来、私は高校で一年生を対象に「宗教」の授業を担当しています。今回は、その経験を少し分かち合いたいと思います。

そもそもこの仕事を引き受けた背景には、信者の減少という現実がありました。教会だけでは生活が成り立たなくなりつつある中、少なくとも自分の生活費くらいは自分でまかないたいという思いがありました。また、教会での働きだけでは時間を持て余してしまうという理由もありました。

しかし同時に、「今、宗教を教える意味」について深く考えさせられました。近年、さまざまな宗教絡みの事件が報道される中で、若い世代の中には「宗教」に対して一種のアレルギー反応のようなものを抱いている子たちがいると感じています。だからこそ、どうすればそのアレルギーを刺激せずに、むしろ癒やしと希望を与えるような宗教の語り方ができるのか、授業の前からずいぶん悩みました。

実際に授業が始まってみると、多くの生徒たちは宗教にまったく縁がありませんでした。中には「幼稚園がカトリックだったので少しだけ知っている」という子もいましたが、大多数は聖書もミサも初体験。それでも、彼女たちの心は驚くほど開かれています。

私がキリスト教の立場から語ることに對して、真剣に耳を傾けてくれる姿勢に、私の方が何度も感動させられました。特に印象的だったのは、ミサに数回参加する機会があった際、その後に感想を書いてもらったことです。「平和を感じた」「泣きました」「別世界にいるみたいだった」など、想像以上に多くの学生がポジティブな感想を綴ってくれました。

授業で扱ったテーマは、「自分を知る大切さ」「神の似姿に造られた人間」「キリスト教における愛とは何か」「なぜキリスト教は絶対的平和主義なのか」「創造物語に見られる人間の成長と人生観」など、多岐にわたります。これらのテーマを通して、自分自身のこと、他者のこと、そして神のまなざしについて、少しでも何かを感じてもらえたらと思っています。

私にとって、カトリック教会や信仰、聖書のことをまったく知らない方々に教えるのは、初めての経験でした。だからこそ、どのようにしてキリストの愛や喜びを伝えるかというのは、大きなチャレンジでした。同時に、初代教会の宣教師たちや、日本に初めて来た宣教師たちの気持ちを、ほんの少しだけ理解できたような気がしています。

毎回、授業の最後に10分間の振り返りの時間を設けているのですが、そこに書かれた学生たちの言葉に「伝わった!」と思える瞬間があると、本当にうれしくなります。教える側であるはずの私自身が、彼女たちから大きな喜びと力をいただいているのです。

これからも、宗教に対する偏見や先入観を少しでも取り除きながら、「あなたは愛されている存在である」というキリストのメッセージを、学生たちの心に深く届けていきたいと思っています。

このように学校での活動を続けていくことができるのは、土崎教会共同体のあたたかな支えがあってのことだと、実感しております。ひとりの活動ではなく、これはまさに「私たち土崎教会」の活動であり、皆さま一人ひとりの祈りと励ましが、この働きを支えています。どうかこれからも、私たちのこの歩みの上に変わらぬ祈りとご支援をお寄せくださいますよう、心よりお願い申し上げます。

主任司祭



8月17日（土）午後3時から、聖体奉仕会の巡礼が行います。

当日はロザリオ一連、ミサ、聖体賛美式を予定しています。

暑さが予想されますので、体力に不安のある方は無理をなさらず、

ご自身の体調を優先してください。

